

2025年度(令和7年度)学校評価自己評価表

至誠中学校区	校番73	福山市立山南小学校
	最終更新日	2026年(令和8年)2月10日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容
<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育修了段階の子どもの姿を共有し、教育活動の充実を図る。 ・小規模校の特色を生かした教育活動を推進する。 ・一人一人の個性を尊重し、多様性社会の担い手の育成に向けた取組を推進する。

児童生徒の現状
<ul style="list-style-type: none"> ・確かな学力の定着や学習習慣の確立及び基礎体力に課題がある。 ・積極的に挨拶をすることができ規範意識が高いが、自己肯定感が低い児童・生徒もいる。 ・自分で考えて行動することが苦手である。

育成する力 資質・能力	主体的に学び合う力
めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	自ら課題を発見し、自分で考え、協働して解決することができる子ども
中学校区として 統一した取組等	○授業づくり 単元で『身につけるスキル』を明確にした授業を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

III 自校

ミッション
どんな社会の変化も肯定的にとらえ、他者と協働しながら未来社会で生きる子どもを育成する学校

学校教育目標
夢をもち 社会で活躍できる児童の育成

現状
<p><児童生徒></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分の考えをもって学ぶことができた」の肯定的評価は、83.9% ・「自分の考えを深めることができた」の肯定的評価は、78.2% ・国語・算数の単元末テストの40%未満の児童は、国語(知・技)が2.4%、(思・判・表)が1.2%、算数(知・技)が1.2%、(思・判・表)が4.7% <ul style="list-style-type: none"> ・自分達で計画・実践する学習活動や学校行事等を実施している。 <p><授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科部会に分かれ、言葉や数に着目した協働的な学びや考えをもつための手立てについて対話を行っている。学習活動の流れに、振り返りをする時間を確保し、児童が次につながる振り返りができるようにしている。 ・授業づくりの視点を具体的に示し、授業実践をしていくことに課題がある。

育成する力 資質・能力	めざす子ども像				
	1 自分から進んで 取組む力(主体性)	2 友達と協力する力(協働性)	3 目標に向かって やり遂げる力(やりきる力)	4 みんなのことを考え みんなのために働く力(社会貢献力)	
1・2年	自力解決や協働解決の素地が育っている 理由をつけて自己の考えを表現できる	自分にとってふさわしい目標やめあてを決めて学習する。	自分の意見やアイデアを友達に納得してもらえるように説明し合う。	自分でやると決めたことを最後までやり遂げる。	相手の気持ちを考えながら、互いの存在や立場を尊重しようとする。
3・4年	多様な主体的・協働的な活動ができる 自己の考えを活動を伴って検証できる リフレクション	グループやクラスでの話し合いの時に自分の考えや意見を積極的に出す。	グループワークの時に、友達と協力して課題やめあてに取り組む。	目標に向かって諦めずに挑戦する。協力して活動する。	公共の利益のことを考えようとする。
5・6年	自己決定を含む主体的・協働的な活動ができる リフレクションを通して自己の考えを発展できる	グループや自分で決めた計画にそって、進んで調べたり作ったり発表する。	友達の良いところやアドバイスを生かして、より良い考えや作品を作る。	自分で目標を立て、目標達成に向けて主体的に行動している。	人や社会の役に立ってことへの喜びや達成感を感じている。

研究	テーマ	自分の考えをもち、他者と協働しながら解決しようとする児童の育成
	内容等	児童が自ら課題を見つけ、自分の思いや考えをもち、他者と協働しながら解決していく。
めざす授業の姿		○課題解決の手がかりになる見方・考え方を使って自分の考えをもつ主体的な学びが行われる授業。
		○言葉や数などに着目した対話による協働的な学びが行われる授業。

年 目	中期経営目標	重 点 分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
						□指標に係る 取組状況	力 加 入 評 価	達 成 評 価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 加 入 評 価	達 成 評 価	綜 合 評 価	改善方策
3	学びに向かい、 学び続ける児童 の育成	★ 継 続	児童の実態をもとにした指導方法を工夫し、学力の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科部会を設定し、児童が自分の考えをもつための手立てや、協働的に学び合うことができる授業づくりを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語、算数の単元末テスト(思・判・表)、福山市学力定着状況調査(4・5年)、標準学力調査(2・3年)で40%未満の児童を15%以下にする。 ・児童アンケート「①自分の考えをもって学ぶことができた」「②自分の考えを深めることができた」の2項目で肯定的評価を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> □国語、算数の単元末テスト(思・判・表)、福山市学力定着状況調査(4・5年)、標準学力調査(2・3年)で40%未満の児童は、15.1%だった。 □自分の考えをもつために、課題解決のための見通しをもたせ、言葉や数に着目した指導を行った。児童アンケートの肯定的評価は、①89.3%、②85.3%だった。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ノート指導を全学年で統一し、自分の考えを書く時間を確保し、考えを伝え合って思考する力を付ける。 ・振り返りの視点を児童に意識させることで、自分が何を学んだのか、理解できたかどうか考えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □国語、算数の単元末テスト(思・判・表)、福山市学力定着状況調査(4・5年)、標準学力調査(2・3年)で40%未満の児童は、8.5%だった。 □ノート指導を全学年で統一し、自分の考えを確保する時間を設けた。また、授業の中で考えを伝え合う活動を仕組み、思考する力を付ける授業づくりを行った。児童アンケートの肯定的評価は、①92.0%、②86.7%だった。 ◎自分の考えをもつことを大切に授業づくりをすることで、学びに向かう児童の育成につながった。 	3	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・ノート指導の統一や、考えを書く、伝え合う活動が思考力の向上につながったと考えられるため、来年度も継続して取り組む。 ・授業の中で、考えをアウトプットする場を設定しているため、来年度はそのさせ方を研究授業等で検証していく。 ・校外で学んだことなどを校内で共有し、考えを深め合うための手立てについて研修を深める。
				<ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジタイムの充実を図る。 ・時間を決めて家庭学習に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語、算数の単元末テスト(知・技)で40%未満の児童を10%以下にする。 ・読書貯金の目標達成率を70%以上にする。 ・児童アンケート「自分で決めた家庭学習の時間を守ることができた」の肯定的評価80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> □チャレンジタイムを見直し、漢字・読書・計算に計画的に取り組んだ。国語、算数の単元末テスト(知・技)で40%未満の児童は、2.1%だった。 □委員会を中心に読書貯金の達成者の掲示や、読書活動の推進をした。8月現在の達成率は20.5%だった。 □家庭学習の時間を決めて取り組んだ。児童アンケートの肯定的評価は82.7%だった。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、チャレンジタイムに計画的に取り組む。 ・読書活動について保護者にも協力を呼びかけ、家庭でも読書を進められるようにする。また、児童が読みたい本のリクエストを募集した選書を行うことで、読書意欲を高める。 ・ミニテストと連携した家庭学習になるよう計画して目的意識をもって取り組めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □チャレンジタイムや、実態に応じた家庭学習、適応題などに取り組んだ。国語、算数の単元末テスト(知・技)で40%未満の児童は、3.6%だった。 □本のリクエストを集ったり、保護者への協力、チャレンジタイムでの読書タイムに取り組むことで、読書意欲の向上を図った。2月現在の達成率は60.5%だった。 □引き続き、家庭学習の時間を決めて取り組んだ。児童アンケートの肯定的評価は85.3%だった。 ◎児童の実態をもとにした課題や指導方法を工夫し、基礎的な学力の向上が少し見られた。 	3	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジタイムに取り組む時程や内容をきめて取り組みを見直し、全学年が確実に取り組めるようにしていく。 ・様々な本のジャンルに児童が触れることができるような取り組みを考え、実施する。 ・家庭学習では、音読、漢字、計算、日記に学年に応じた時間取り組めるよう、実施する。
3	自他と学校、地 域を大切にす る児童の育成	継 続	児童主体の学習活動や学校行事等を推進し、児童の自己肯定感や郷土愛を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・山南スポーツフェスティバルや山南フェスティバルなど、行事への取り組み過程や終了後に互いのよさや努力を認める場を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケートの自己肯定感に関する「自分によいところがある」「友達のよさを見つけた」の2項目で肯定的評価を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> □一迎会や遠足、山南スポーツフェスティバル、山南夏祭りなど児童が企画した行事等を実施した。 □児童の肯定的評価は「自分によいところがある」「友達のよさを見つけた」の2項目で84%であった。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も、児童主体で企画・実行していく行事等を推進していき、自分や互いのよさに目を向けた振り返りや相互評価を行い、自己肯定感の向上を図る。 ・教職員も、教育活動全体を通して、児童のよさに目を向けた評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> □オリエンテーリングや全校遊び、やさしさ放送等、児童が企画したものを実施した。行事や他学年と教科交流をした際には、手紙交換を通してお互いを認め合う活動につながった。 □児童の肯定的評価は「自分によいところがある」「友達のよさを見つけた」の2項目で84.7%であった。 ◎児童主体によって意欲が高まったり、互いのよさを認め合うことによって自己肯定感が少しずつ高まったりした。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア学年、たてわり班、全校児童など、場面に応じていろいろなかかわり方を意図的に取り入れる。 ・同学年だけでなく、異学年の児童のよさにも目を向けられるように価値つけていく。
				<ul style="list-style-type: none"> ・生活科や総合的な学習の時間等で地域の人、もの、ことを積極的に活用し、地域のよさに触れる機会や場を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員アンケート「地域の人や課題などに児童が直接触れる機会を持っている」児童アンケート「山南が好きである」の2項目で肯定的評価を85%にする。 	<ul style="list-style-type: none"> □地域の人と関わる学習を2～6年(2年：かしわもちづくり、3年：竹の置物づくり、4年：福祉体験、5年：ぶどうのジベレリン体験、6年：平家谷学習)で実施することができた。 □教職員の肯定的評価は 	3	4	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の学習内容に応じて継続的、計画的に地域人材を活用した学習を行い、全学年、地域と関わるふるさと学習を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> □地域の人と関わる学習を全学年で実施することができた。(1年：昔遊び、2年：町探検、3年：豆腐づくり、4年：高齢者施設との交流、5年：ぶどうジャムづくり、6年：ゆずジャム販売) □教職員の肯定的評価は「地域の人や課題などに児童が直 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も地域の人とかかわりながら、学年や学習内容に応じて地域人材や施設を計画的に活用していく。

					「地域の人や課題などに児童が直接触れる機会を持っている」100%、児童の肯定的評価は「山南が好きである」89.3%であった。					接触れる機会を持っている」100%、児童の肯定的評価は「山南が好きである」93.3%であった。 ◎地域の人、もの、ことを計画的に活用し、かかわる機会をもつことで、郷土愛の育成につながった。					
	継続	自己の体力や生活についての課題を知り、よりよい自分を目指して取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣について目標を設定して取り組み、自己評価する。 体育科での基礎体力向上の取り組みや体力づくり、外遊びを推進し、体力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活ふり返り週間で就寝時間とメディアの2項目において、児童の肯定的評価80%以上にする。 「運動することは好き」や「体育の授業は楽しい」において、児童の肯定的評価を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動・生活についての自己目標を設定する際には家庭の協力も得られるよう、保健便り等で家庭にも周知して取り組んだ。達成率は、「就寝時間」69.2%、「メディア」78.2%であった。 ◎場の設定の工夫や、主運動に関わるゲーム性を取り入れた準備運動を計画的に実施し、授業改善につなげた。運動や体育の授業に関する児童の肯定的評価は78.7%、89.3%であった。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 生活ふり返りの結果をもとに、中学校区での統一した取組として実施し、保健便りに家族や児童のコメントを掲載するなどして、実践意欲につなげる。 運動の特性に合わせた準備運動や感覚づくり運動を継続して実施し、運動時間を保障するとともに楽しみながら体力向上に向けた取組を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活振返り週間の達成率は、「就寝時刻」73.5%、「メディア」83.1%であった。 ◎運動や体育の授業に関する児童の肯定的評価は、どちらも89.3%であった。 ◎応援メッセージや肯定的なコメントを保健便り等で共有したことで、実施意義の確認や達成感につながった。全校での統一した準備運動の実施や、場の設定の工夫により、運動する楽しさを実感している児童が増えた。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 今後も「生活振返り週間」を中学校区での統一した取組として継続実施し、校区の課題を共有するとともによりよい生活習慣の確立・定着につなげる。 体育科の授業を中心に、学校行事と関連させた外遊びの奨励や室内外の運動の紹介等、運動する楽しさを実感できる取組を継続して実施する。 		
3	意欲、やりがい を発揮できる教育環境の整備	一部変更	働き方改革を進め、教職員が個性を発揮しながら教材研究や児童と向き合う時間を確保する。	<ul style="list-style-type: none"> 暮会や研修内容をデジタル化し、効率化を図るとともに、スケジュール管理により見通しをもった業務を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「子どもが自ら学ぶ」授業づくりにあてる時間がある。」の教職員評価を前年度(71.4%)以上にする。 「本音を気兼ねなく発言でき、自分の個性が認められているという実感がある。」の教職員評価を前年度(85.7%)以上にする。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 引き続きデジタル化を推進していくこと、仕事を「見える化」し、優先順位をつけて仕事を行うことで、時間を生み出すようにする。 ◎教職員同士、日ごろからコミュニケーションを密にし、思いを共有し合い、認め合うことで、いろいろなことに自信をもって挑戦できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎教職員の肯定的評価は87.5%であった。職員同士の個性を尊重し、否定ではなく共感する姿勢をそれぞれが持つことで、安心して自分らしくいられる場所になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続きデジタル化を推進していくこと、仕事を「見える化」し、優先順位をつけて仕事を行うことで、時間を生み出すようにする。 ◎教職員同士、日ごろからコミュニケーションを密にし、思いを共有し合い、認め合うことで、いろいろなことに自信をもって挑戦できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎教職員の肯定的評価は87.5%であった。 ◎教職員の肯定的評価は87.5%であった。 ◎暮会や研修でのICT活用によるスリム化、会議の削減、行事の見直しなど業務の精選を行うことで、授業づくりにあてる時間を生み出すことができた。何でも相談できる温かい雰囲気づくりを行うことで、教職員は失敗を恐れずさまざまなことに挑戦することができた。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 行事や時程の見直し、帯タイムの使い方など子どもたちの力をつけるために最優先にやるべきことを議論し、業務を精選していくことで授業づくりにあてる時間を確保できるようにする。 ◎教職員同士が積極的にコミュニケーションをとることで、思いを共有し合い、それぞれの個性を認め合うことで何でも言える温かい雰囲気づくりを行う。

目標・取組及び評価指標等の設定と評価

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。